長谷寺の雪

長谷寺が特に華やかになるのは桜と牡丹と紅葉の季節です。秋になると全山燃えるような紅葉が長谷寺を包み込みます。

牡丹は、長谷寺と當麻寺、石光寺が最も美しいと思います。同じ日に三つの寺を同時にはしごして訪れるとそれぞれの牡丹園を見ることができます。奈良の寺で見る花は非常に短い期間しか咲いていないので私は、奈良の花暦をつくって同じ日に同じ花が咲く寺を複数、訪れることにしています。そうすれば盛りが過ぎて残念に思うことがないからです。

長谷寺に雪が降るのは少ないのですが、その光景は格別です。楼門と門前町に雪が積もった風景です。

長谷寺の牡丹

室生から桜井市の方向へ自動車で二〇～三〇分走ると初瀬の町にさしかかります。
地名を呼ぶ時には初瀬、寺の名は長谷と呼ぶそうです。
緑豊かな初瀬山・・・・・・・。その中腹に長谷寺があります。長谷寺は真言宗豊山派の本山として、また西国三十三観音霊場第八番札所として、全国に末寺が三千余ケ寺もあり、檀信徒はおよそ三百万人もいるといわれます。四季を通じ花の寺として多くの人々の信仰を集めています。奈良の東大寺に次ぐという大きな本堂に長谷寺のご本尊である観音菩薩像があります。その観音さまは、十一面観音で、右手に錫杖（しゃくじょう）、左手に水瓶（すいびょう）を持っておられ、高さが十メートルを越す日本で最大の木像観音です。

長谷寺の牡丹

長谷寺の桜

長谷寺の本堂は寺の一番上の方にあり、礼堂と呼ばれる内舞台の外に清水寺のような懸崖の大舞台が張り出しています。

ここから眺める景色がとてもすばらしく長谷寺の堂塔が一望のもとに見えます。四月の五日～中頃に行くと、本堂の舞台から見る桜が右も左も息を呑むほどです。桜の花の中に、本堂や五重塔が浮かぶ姿を、桜の浄土と呼ぶ人もいるくらいです。

紫式部の源氏物語の舞台にもなっており「長谷観音は数ある仏の中の御仏」と述べています。清少納言も長谷詣でをしたことを、「枕草子」に書いており、蜻蛉日記、更級日記にも長谷詣でが出てきます。

長谷寺の五重の塔

長谷寺は庶民のお寺。休日にはどこからこんなにたくさんの人が集まったんだろうと思うほど人が集まってきます。
奈良時代に開かれた長谷寺は、古来、初瀬川に沿って門前町がにぎわいました。
伊勢参りの街道にもなっていたそうです。
門前町の両側の店にはみやげものや食べるもの、野菜、果物、海産物、奈良漬けなどを売る店が建ち並び、楽しくてついつい余分なものまで買ってしまいます。
長谷寺の中でも特に目立って美しい朱塗りの五重の塔は紅葉や桜や雪景色のなかでとても優雅な姿になります。

長谷寺のぼたん

昔から長谷詣での人たちは寺に数日参籠して観音様の「夢のお告げ」を待ちました。

「今昔物語」のわらしべ長者の話をご存じだろうか。長谷寺観音に二十一日間、参り続けた貧乏な若者が「寺を出るとき、手にした物を決して捨てるな」と観音様から夢のお告げを受けました。帰り道、大門で転んで起きた時に手にしたのはワラしべ一本でした。これにアブをつないで歩いたところ、ミカン→布→馬と次々と交換し、ついには田畑と米を手に入れ、金持ちになって子孫も栄えた話。

それが牡丹の絵と何の関係があるの？などと野暮なことは言いっこなし。牡丹の花は観音様のように美しいのです。

長谷寺回廊と牡丹

長谷寺の登廊の両側には、百五十種・約七〇〇〇株もの牡丹が植えられています。四月終から五月の始めに、牡丹祭りがあり、きれいに咲いた牡丹の花を、観音様にさげます。牡丹祭りは、なんと一一〇〇年も昔からある行事だそうです。唐の后妃、馬頭夫人が観音様の霊験を得たお礼にと長谷寺に牡丹を献木したのが始まりと言われています。五月の連休になると花の盛りがやや過ぎて散りかかってきますので、私は毎年、四月の最後の土日に訪れますが、つぼみの牡丹と開いた牡丹が混在してとてもいい感じです。写真を撮る人やスケッチをする人が多くいます。

長谷寺の錦秋

長谷寺は春と秋と雪が素晴らしい。
舞台から下はいずこも赤や黄色の紅葉の中に回廊や楼門が埋もれています。
長谷寺をおおくの人が訪れるのは、詣でのためであるほかに季節によって全然く違った感動があるからでしょう。平安の昔から、桜も、牡丹も、紅葉も、季節毎に違う顔で庶民を惹きつけてきたにちがいないと思います。

長谷寺の楼門と紅葉